

# 序

著者	郭 南燕
雑誌名	世界の日本研究
巻	2014
ページ	5-8
発行年	2015-03-06
その他の言語のタイトル	Introduction
特集号タイトル	日本研究の隆盛 Japanese Studies in Florescence
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00003622">http://doi.org/10.15055/00003622</a>

## 序—Introduction

郭 南燕  
Guo Nanyan

本冊子は、国際日本文化研究センターで研究活動を行う外国人研究者と所内教員が執筆した海外の日本研究に関する報告集である。昨年に次いで、今年も刊行する運びとなった。

今号の特色は、海外諸国、大学、専門分野における日本研究の隆盛を示すことである。昨今、日本経済の低迷によって、日本研究が中国研究・韓国研究に押され気味で、日本文化に対して関心が薄くなってきているのではないと思われるがちであるが、実際にはそうではない。日本研究が活発に推進されていることがこれらの報告を通じて分かる。経済の成功か否かにかかわらず、日本文化への深い関心のゆえに、日本研究が活発化していることが現実である。

最初の報告は、ベルリン自由大学のイルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏による第4回人間文化研究機構日本研究功労賞受賞時の記念講演録「ヨーロッパから見た日本研究—芥川龍之介を例として」をそのまま掲載させていただくものである。氏は、日本経済の盛衰によって海外の日本研究を判断することは間違っていると、ドイツで日本研究が盛んである実情を紹介してくれる。さらに、日本国内の文学研究にありがちな作家の伝記的事実への執着はむしろ作品の解釈をないがしろにしていると指摘する。具体的には、芥川龍之介の『侏儒の言葉』を、ヨーロッパの警句との比較において読めば、芥川の先鋭性と普遍性がわかり、『手巾』を緻密に読めば、当時の様式化、演劇化、宗教化された「武士道」を批判する芥川の、近代日本の文化に与えた優れた貢献を理解することができるだろう、と述べる。

ドイツ・ハイデルベルク大学の Harald Fuess 氏の報告は、日本研究を推進する世界最大組織「ヨーロッパ日本研究協会」(European Association for Japanese Studies)の現状を教えてくれる。ヨーロッパにおける日本研究は近年、日本語の学習者数と日本研究のレベルが空前のものとなり、日本の GDP が世界3位に落ちたことを憂慮する必要はないという。氏はヨーロッパの日本研究を発展させていくために、博士課程学生の日欧交流と、日欧共同で学術書を刊行することを提言する。

同じハイデルベルク大学の Anna Andreeva 氏は、2007 年に組織された「世界におけるアジアとヨーロッパ」という優秀研究群 (Cluster of Excellence) を紹介している。この研究群は多文化接触 (transculture) という視点から、日本の言語・産業・政治・宗教・絵画・写真・ジェンダーなどを研究し、ドイツの日本研究における課題の新しさが見られるとしている。

ドイツ・ライプツィヒ大学の Elisabetta Porcu 氏の報告は、地域研究センター (Center for Area Studies) と日本研究学科の研究状況を示す。センターの中心テーマは「文化接触とグローバル時代の政治秩序」で、多地域・多分野にまたがる研究が特色だとする。氏自身の現代日本の宗教とポピュラーカルチャーに関する研究も披露してくれる。

ラトビア大学の Agnese Haijima 氏の報告では、ラトビアと日本との外交関係、日本語・日本文化の教育の始まり、日本文学の翻訳の現状、研究者たちの経歴を紹介している。日本研究が始まってまだ日は浅いが、徐々に発展していく勢いがついているという。

ロシア極東国立人文大学のエカテリーナ・レフチェンコ氏は、ロシアでは近年、日本研究者が減少しているものの、研究書と論文の数が増えたことにより、日本語学習者は増加していることを報告してくれる。一方、ギリシャ・アテネ大学のスティリアノス・パパレクサンドロプロス氏は、ギリシャの大学では日本学科の設立が困難であり、日本研究の進展が遅いことを報告し、数少ない日本研究者の懸命な努力に言及する。

日本庭園の研究者である韓国・ソウル大学校の Wybe Kuitert 氏は、ヨーロッパにおける日本庭園の研究史と同時に、氏自身の禅庭園に関する研究成果を紹介する。氏の研究は英語で刊行されているが、日本人研究者に注目されていないため、日本国内の禅庭園の研究を十数年遅らせていると指摘。さらに、ヨーロッパでは日本庭園の資料調査が不足し、研究に限界があるのに加え、日本人研究者が海外の日本研究にあまり興味を示さないため、学問の進展と交流が阻害されている現状を教えてくれる。

アジア地域の日本研究に関しては、ベトナム国家大学ハノイ校のファン・ハイ・リン氏が、ベトナムと日本の両国関係を辿り、ベトナムにおけるここ 40 年の日本研究の進展と多くの研究書の出版について紹介する。日本関係の資料と文献が不足しているにもかかわらず、多面的に日本研究を行っているベトナムの研究者の取り組みは印象深い。

韓国・檀国大学の鄭濬氏は、日本古典文学の韓国語翻訳の概況に加え、日本近世期の人文学に関する学術書と翻訳を紹介し、近年、韓国の日本研究には細分化と多様化が見られ、韓日比較研究が活発化し、また、中国を視野に入れた東アジアという角度からの日本研究も始まっているとする。同じ檀国大学の朴暎美氏の「韓国における日本儒学の研究」は、荻生徂徠と伊藤仁斎を中心とする研究成果と朝鮮儒学との比較研究を概観することにより、韓国の日本儒学の研究は、日本に留まらず、アジア全体の儒学研究に貢献し得ると指摘する。

北京大学の徐勇氏の「21世紀の中国における抗日戦争史の研究」は、今世紀の中国における、日中戦争に関連する軍事・歴史・経済・産業・文化・教育・出版など、多分野にわたる研究の盛況ぶりを詳しく述べる。上海・華東師範大学の唐権氏の「中国の日本研究叢書ブーム」も、日本研究の隆盛がもたらした大量の叢書類の出版について取り上げ、中国人研究者の著書だけではなく、日本や欧米の日本研究書の翻訳も含まれていると指摘し、叢書の出版は日本研究を推進しているだけではなく、中国の人文科学研究の向上に貢献しているとする。

上海・復旦大学の戴暎美氏の報告は、復旦大学日本研究センターの活発な研究を概観すると同時に、日中関係の後退により、若者の日本への関心度が低下していることにも言及する。同じ復旦大学の張翔氏の報告は、中国の日本史研究は、漢文文献が中心である古代日本と、現代日本語文献が中心となる近現代史に集中する傾向を指摘し、日本史の研究概況を紹介する。

モンゴル Choi. Lubsangjab University of Language and Civilization の Borjigin Lubsangjabyn Soyombo 氏は、1993年に設立された同大学を紹介し、日本語教育が近年盛んになり、日本研究もこれから展開していくという見通しを示す。

ブラジル・ブラジリア大学に勤務経験のある根川幸男氏の報告は、ブラジル日系移民の子弟教育に関する先行研究、研究の現状、将来の課題を紹介するとともに、多民族国家ブラジルにおける日系移民の二言語・二文化の教育を詳述し、当研究分野の学術的意義を教えてくれる。

米国・インディアナ大学の Michael Dylan Foster 氏は、北米における日本の妖怪マンガ・アニメの享受、妖怪研究の進展、それに関する学術書について報告する。妖怪研究は、日本の伝統芸術としてだけではなく、現代日本の大衆文化としても研究され、注目されている。妖怪の登場するマンガ・アニメに対する学生や社会人の関心が、妖怪研究を促進する力になっていると指摘する。

以上の報告に続いて、海外研究者の日本文化と文学に関する随筆を三本掲載する。上海・華東師範大学の陸留弟氏は、寿司の形や色、盛り付けなどの視角的効果に深い興味を示し、世界に行き渡る日本食文化の波及力に注目する。ベトナムのフエ教育大学の Nguyen Anh Dan 氏とベトナム国家大学ホーチミン社会科学学校の Ngo Tra Mi 氏は、村上春樹の文学に熱中するベトナムの若者の心理をそれぞれの読書経験から描写してくれる。

日文研の稲賀繁美氏の「台湾における満洲地域文化研究の現状瞥見」は、2013年3月19日に、台湾中央研究院・人文社会科学研究中心・アジア太平洋区域研究専題中心が主催した懇談会での研究報告と発言を整理し、日本の植民地だった台湾と満洲はいずれも周縁地域とされ、中国文化史から排除された共通点があること、また、台湾では人的資源や資料の蓄積が豊富であるため、台湾を中心とする満洲研究の必要性が論じられたことを紹介する。稲賀氏は、満洲国を「偽」という一字で片付けて満洲の歴史を改竄した問題や、満洲で実験した多民族国家の理念を考察し、帝国日本の世界規模の移民政策の中に満洲問題を位置づける必要があると指摘する。

以上、本報告集では、世界各地で生まれている新しい角度からの日本研究の成果と同時に、日本研究が進行していない地域の問題を紹介する。日本研究の現状を把握するうえで有用なデータも多いので、研究推進のために役立つことを期待している。